

白き黄昏

入院初日（7月25日）

漏れる声 聞き返しては 叫られて 普通りの 強き母
「良明よ 辛い・しんどい」 繰り返す 幼女の「」とき 弱き母
強き母 弱き母とが 鬼ごっこ

モニターの 警告音は 絶え間なし 母と我との 辛き病室
つなぐ手に 返る力の 大きさは 望みをつなぐ 尊き便り

二日目（7月26日）

風呂・トイレ 望みかなわぬ 食事でも
ねだられて 摂げる背中に 「いい気持」 遠き昔の 裏表かな
子らの名を 交互に呼びて 細き手を 虚空に浮かせて 捱まんとする
「おいしい」と 最期に食べし 夕食後 静かな眠りに 心安らぐ

旅立ち（7月27日午前5時6分）

早朝の 思わぬ鍵音 我に告ぐ 最後の別れ 叶わぬことを
望みなき 蘇生と知れば 安らかな 死顔もって 心鎮めん
詳細が 見事に飛びし 記憶より ただ冷たさと 白さのみある
不思議なり 無感情に 進めたる 死の確認に 以後の対応
かく早き 別れを読めず 恨まれる 心の隙と 疎い医療を

母生きぬ あに母遊きぬ 夏の朝
母遊きぬ ああ母行きぬ 一人旅
母遊きぬ なお母生きぬ わが胸に

泣くまいと 瞳を閉じて 見上げれば 流れる汗に 涙混ざれる
目を閉じて 戻りし我が家 二年ぶり 南が北に 寝向き変わりぬ
弔問に 旧き隣人 訪ね来て 故人をよそに 会話はずまん

通夜・葬儀（7月28/29日）

読經超え 安らに眠る 母愛おし

蓮如の お丈の教え 改めて 知るや縁（えにし）の 淡さ・はかなさ
母なれば 喪主の挨拶 断りし 泣こらえて 語る術なし
ひと気なき 光に浮かぶ 祭壇で 心置きなく 長く語ろう
棺の母 遺影の母も 語らねど 胸に届かん 子らへのエール
切り花が 豊かに飾る 旅衣装

その後（7月30日—8月7日）

蟬しぐれ 母を亡くして 胸に染む

浄土にて 樂穂・惠俊の 二輪草

骨壺の 前に座りて 振り返る 情と涙が 想い出縁取る

甘えんば 隙見て母に まといつく

「母ちゃん」と 甘えし頃が 懐かしき 孫持つ身とて 人の子なれば
百貨店 そそく愛しさ 感じつつ 屋上遊具に お子様ランチ
薬つ子 心配多き 子育てよ 頭痛・風邪・下痢 莢麻疹ほか
ないものと 固く信じた この母に 市場帰りの 井戸端会議
一日を 家事に終わらず 使い切る 勉強学校 夜まつり縫い
誇らしき 想い出多く 蘇る 才色兼備 母の生き様

凝りし肩 按摩をねだり 細き指 ツボを外すも 億点誓う
満点に 届かず切に 諭されて 重ねた努力 今を創りし
貧しさを 質素と読み替え 我もまた 母に倣（なら）いた 高きプライド
清水家を ともに支えた 物語 いつかあの世で 語り綴らん

八十の 手習い見事 身に就けて 届くメールに 添えられし歌
堅き故 心裏腹 単直な 強き物言い 今は悔やまる

龍の鳥 「いやだいやだ」と ダダこねる 諭す理屈に 情が掉さず
理不尽に 返す言葉に 棘が付く 目に入る姿 我に棘なす
本来は 説教などは 親のもの 老いた母へは いとおぞましき
負けたのか 三つ子の魂 最期まで ついに変えれず 口惜しき一杯

生きる糧 見つけて欲しい あれこれと 期す「届けん」と 貯め置きし拙句
「これ読んで」 母に倣いし わが歌の 添削頼み 目の色窓う

赤ペンの 入らぬままの 作品は 「上手になつた」 の 総評のみぞ

あれこれと 母の振舞 顧みて 自ら決めし 最期の時か
後になり 進まぬ時計 腕に見て 今わの時を 我に告げしか

旅終えし 孫らの無事を 見届けて わが身といえど いそと旅立つ
満一歳 ひ孫の幸を 願かけて 高みて祝う 姿浮かばん

襞（ひだ）隠し 心残りの 多きこと 思いを保つ 糧と強がる